「推し」て、知るべし
―三渓・原富太郎に学ぶ「推し」の美学

書評家 渡辺祐真（わたなべ すけざね）

Essay 時の調べ

三渓園という場―芸術は我々の写し鏡

私は普段、ゲームのシナリオライターとして働いている。だが最近は、趣味で行っていた文学や書籍にまつわる発信に反響を頂戴し、大好きな作家さんと対談をさせてもらったり、こうして原稿を書かせてもらえたりしている。

今回は、こうして自分の可能性を広げてくれた、ある実業家の精神について書いてみたい。

神奈川県横浜市に三渓園という庭園がある。四季折々の花鳥、用途と季節に沿った名建築、丘も泉も森林もあって、その上、東京湾まで臨めるという、およそ景観の美で無いものは無いほどの名所である。造成したのは、戦前の実業家「原富太郎(号は三渓)」だ。帝国蚕糸の社長や横浜興信銀行の頭取を務め、横浜を中心に日本経済を動かした大実業家である。だがそれと同時に、原には芸術愛好家の一面もあった。芸術を愛し、せっせと買い集め、数千点はくだらない一大コレクションを築いた。さらに、横山大観、小林古径といった画家やノーベル賞詩人タゴールらと交わり、三渓園に招いては芸術談義に花を咲かせたという。

さかのぼればかつては、原の他にも、益田孝や松方幸次郎、川崎正蔵など、大実業家でありながら、芸術を深く愛した魁傑がいた。彼らの共通点は、自分の目を信じ、対象に惜しみない愛と財産を注ぎ込んだことである。原と親交のあった美術評論家の矢代幸雄は、原の芸術への態度をこう語る。「原さんの成すところ、すべて厳格に己が体験の基盤に立ち、他人は何と言おうとも、自分はこう思う、という確信の根拠を持っていられたことが、人生の上にも、美術の上にも、あれほどの大いなる結果を生んだ(注1)」。

この言葉は、批評家の小林秀雄による「考える」論を彷彿とさせる。小林は「考えるとは、物に対する単に知的な働きではなく、物と親身に交わる事だ。物を外から知るのではなく、物を身に感じて生きる、そういう経験[注2]」、だと説いた。つまり、真に対象を理解するためには、原や小林のように、対象に躊躇なく没頭せねばならない。

現代において、それだけの覚悟を持って、芸術に向き合っている人が果たしてどれほどいるだろうか。この問いに対して、各人の自由に受容すればいいではないかという指摘があるだろう。確かに、その自由が侵害されてはならない。だが、同時に忘れてはならないのは、芸術とは、芸術家によってのみ作られるわけではないということだ。受容者による評価は、多かれ少なかれ芸術家に影響を与える。換言すれば、芸術を支持し、金銭を投じる我々受容者も間接的な作り手と言える。即ち、芸術は我々の写し鏡なのだ。歴史上、パトロンやメセナ活動といった芸術の支援が、芸術に一定の方向性を与えたのはその傍証である[注3]。

三溪園　撮影：渡辺祐真

「推し」こそ芸術に対する真摯な姿勢を築く鍵

今日、ジャンルを問わず、芸術に対する真摯な姿勢を築き上げる鍵となるのは、「推し」ではないかと思っている。流行語大賞にもノミネートされた「推し」とは、支持する芸能人やアニメキャラクターなどを熱狂的に尊ぶ感覚を意味する。横川良明は、応援と峻別して「推し」を次のように特徴づける。「第三者に推しの良さを語り、あわよくば好きになってもらいたい。この布教精神が、自己完結型の「応援」とは異なる熱狂を生んでいるのです[注4]」。好きな対象に対して、本気で愛と金銭を注ぐこと。その時には、原のように自分の全存在を賭ける。恥など要らない。その結果、自分にも、対象にも、共鳴してくれる人にも、ひいては芸術全体にまで影響を与える。何かを本気で「推す」ことは、自己を世界に投じ、自分と世界をほんの少しだけ変えることなのかもしれない。「推しを取り込むことは自分を呼び覚ますことだ。諦めて手放した何か、普段は生活のためにやりすごしている何か、押しつぶした何かを、推しが引きずり出す。（中略）あたしはあたし自身の存在を感じようとした[注5]」

2021年に芥川賞を受賞した『推し、燃ゆ』を読むと、そんな「推す」ことの力（と、その危険性までも）を感じられる。同時に、かつてゲームや読書に没頭していた日々を思い出す。誰しもが不安定な10代の頃の私も、「推し」によって呼び覚まされ、自分を感じられた。そして今、その恩返しを少しずつ始められているのかもしれない。

略歴
1992年生まれ。東京都出身。東京のゲーム会社でシナリオライターとして働く傍ら、文筆家として活動。YouTubeチャンネル「スケザネ図書館」での発信も行っている。
著作に『本棚がイギリスの麦畑に思えたとき』（幻冬舎plus）、俵万智の全歌集を「徹底的に読む」（『短歌研究』2021年6月号）、「純喫茶で名文を」（ポータルサイト「ケムール」）などがある。

（注1）矢代幸雄『藝術のパトロン』（中公文庫、2019年）
（注2）小林秀雄『考えるヒント2』（文春文庫、2007年）
（注3）ウィリアム・D・グランプ『名画の経済学』や海野弘『パトロン物語』に詳しい。
（注4）横川良明『人類にとって「推し」とは何なのか、イケメン俳優オタクの僕が本気出して考えてみた』（サンマーク出版、2021年）
（注5）宇佐見りん『推し、燃ゆ』（河出書房新社、2020年）